琉球大学学術リポジトリ

沖縄社会における異質性をめぐる葛藤と入り込み
―沖縄県におけるディアスポラの意識調査から―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 崎濱, 佳代, Sakihama, Kayo
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010177

沖縄社会における異質性をめぐる葛藤と入り込み
—沖縄県におけるディアスポラの意識調査から—

崎濱佳代

1．はじめに

グローバル化の時代といわれる昨今であるが、沖縄県には、外国人登録をしている住民が総数 7,675 人いる。そのなかで、もっとも多いのは米国人で 24.3%、次が中国人で 23.8%、その次がフィリピン人で 21.6%となっている[1]。また、沖縄県は、1899 年（明治 32）から第二次大戦後の 1960 年前後まで、他都道府県に比して、人口比にして圧倒的な割合で移民を排出しており[2]、その子孫が来日、県内に定住するケースも珍しくはない。そのほか、外国人登録者数では把握されない帰化者も含め、いまや沖縄社会には少なくない数のディアスポラが県民として生活しているといえるだろう。そこでは、客人として迎え、また滞在するのとは異なり、いかに勝手の異なる他者と関係を築き、またホスト社会に入り込んでゆくかという、異質性をめぐる葛藤や「入り込み」の問題がある。

本論文では、異質性をめぐる葛藤のうち、異質なマイノリティであるディアスポラの主体性の発揮をめぐって展開されている問題を念頭に置いて分析している。「主体性の発揮」が異質な他者との関わりをめぐる問題の中に位置づけられるのは、特に越境者にとってそれが他者（越境して入ってきた共同体のもともとの成員）と関わらずには達成できないことだからである。

個人が主体性を発揮し、自分の認識をもとにした判断を生かし、自分の能力を生かして自分の発想を実現し、ニーズを満たすには、相応の物資や設備、場所、時間といった資源が不可欠である。それらを手に入れるには、他者との交渉なしではすまない。主体化の欲望を達成するのにはその個人が一人でがんばるだけではだめで、どうしても周りに—他者に付き合ってもらわなくてはならないのだ。もうひとつ挙げた「入り込み」は、先述のような異質性をめぐる資源分配問題の解決として目指される。生活、活動をスムーズに動かすための社会的資源（モノ、サービス、承認など）をほぼ自由に調達できる状態、すなわちそれらの資源が流通している社会関係への参加が成功している状態が「入り込んでいる」状態だと言えるだろう[3]。

主体性を発揮するときに、また主体性を発揮するための資源を調えられる社会関係に入り込むときに問題になるのが、社会的信用の多寡である。社会的信用とは、その人の主張の信頼性を高めて見せたり、考慮しなければならないような重みをつけるもののことだが、実際、数々の属性差別が問題にされる中で、その属性を持つ人が主体性を発揮することを妨げる要因の一つとして、不当に社会的信用を少なく分配されているという指摘は多くなされている。「他者のある世界」では、社会的信用は、主体化の欲望の達成のため他者に自分の世界に付き合わせる力をもたらすものとして必要とされているのである。

上のような問題認識のもと、本論文では、沖縄に定住するディアスポラの住民（外国人と日系人）への調査を実施し、その結果から、①外から来た住民（外国人と日系人）の入り込み—信用獲得戦略へ注目し、彼らの沖縄社会への入り込みの在りようをとおして沖縄における多文化共生の実態を把握すること、②沖縄社会の信用分配の仕方はどのようなものか、以上の二点について論じることを目的として分析を行った。

2．沖縄におけるディアスポラの調査結果

(1) 調査の概要

調査は、アンケート調査とインタビュー調査の二回に分けて行った。2002 年の 8 月から 12 月にかけて行われたアンケート調査では、沖縄県内に在住する外国人・日系人住民に、それぞれのエスニックにより設立している協会を通じて連絡を取ったり、直接彼らの経営する店を訪ねて依頼する、また、外国人のよく来る店で配布するなど、スノーボール・サンプリングに近い形で対象者を求めた。最終的には、年代、ジェンダー、エスニシティともバランスの取れた形で合計 157 の有効回答が得られた（表 1、2、3）。

表 1

		度数	%	有効%	累積%
有 効	20代以下	41	26.1	27.2	27.2
	30代	37	23.6	24.5	51.7
	40代	36	22.9	23.8	75.5
	50代	24	15.3	15.9	91.4
	60代以上	13	8.3	8.6	100.0
	合 計	151	96.2	100.0	
欠損値	無回答	6	3.8		
合 計		157	100.0		

表 2

		度数	%	有効%	累積%
有 効	男 性	87	55.4	55.8	55.8
	女 性	69	43.9	44.2	100.0
	合 計	156	99.4	100.0	
欠損値	無回答	1	0.6		
合 計		157	100.0		

表 3

		度数	%	有効%	累積%
有 効	ペルー	37	23.6	25.0	25.0
	アルゼンチン	9	5.7	6.1	31.1
	ボリビア	5	3.2	3.4	34.5
	ブラジル	7	4.5	4.7	39.2
	その他南米	1	0.6	0.7	39.9
	北米（アメリカ	19	12.1	12.8	52.7
	インド	10	6.4	6.8	59.5
	フィリピン	7	4.5	4.7	64.2
	中国・台湾	7	4.5	4.7	68.9
	その他アジア	4	2.5	2.7	71.6
	オセアニア	1	0.6	0.7	72.3
	ヨーロッパ	1	0.6	0.7	73.0
	日 本	40	25.5	27.0	100.0
	合 計	148	94.3	100.0	
欠損値	無回答	9	5.7		
合 計		157	100.0		

また、インタビュー調査では2002年の12月から2003年の4月にかけて、先のアンケート調査でインタビュー調査に応じてもよいとしてくれた対象者の中から、エスニシティ、年代、ジェンダーのバランスを考慮して 13 人を選び、調査を行った。その結果からは、彼らの戦略の傾向や、そこに映しこまれた沖縄社会の在りようが読み取られる。以下で詳細に見てゆこう。

(2) 調査結果データの分析

前項で述べたとおり、この研究の目的は①沖縄における多文化共生の実態を、外から来た住民（外国人と日系人）の入り込み - 信用獲得戦略に視点を置いて調査し、その結果から②沖縄社会の信用分配の仕方を明らかにすることである。ただ、研究のキーワードとなる「入り込み」「信用」であるが、分析に際しては漠然としすぎるので、直接読み取ることができる言葉で整理しておこう。

「信用」については、研究のねらいから、「ホスト社会である沖縄の人々との対立時の、話の通しやすさ」「対立時の有利さ」として具体化する。この項目は一次調査で取り上げており、この調査から、外国人・日系人住民全体についてトラブル経験を中心とした沖縄社会での実態とその状況に対する意識を読み取ることとする。

また、「入り込み」について見るにあたり、分析の段階では、社会関係への参加—居場所の獲得を、沖縄社会における自己の位置づけの確立、地位の達成への捉え方や展望を通してみてゆくこととする。具体的には、一次調査から全体の沖縄社会への関わりの傾向を確認し、社会関係への参加については二次調査のデータを中心に見る。質問項目の詳細については、紙面の都合上割愛する。

a. トラブルの実態（一次調査より）

1 次調査では、トラブルの実態を見る項目として「Q6.沖縄生活の不都合」、「Q9.就労時の不都合」、「Q12.住居を借りる際の不都合」、「Q10.住みやすさについて」の 4 つの質問への回答に注目した（数字は、質問紙内での質問番号）。これらと「Q7.トラブル時の不利感（質問文「沖縄の人との間で、トラブルに巻き込まれたとき、あるいは、重要な話をしなくてはならないとき、外国人／日系人であることで不利だと思うことはありますか」)」を併せて外国人や日系人の住民にとっての沖縄社会の実態を見てみたい。

「Q6 沖縄生活の不都合」については複数回答とした。全体では、最も多く選択されたのが「言葉」(37.1%)、次が「習慣の違い」(25.2%)、「価値観の違い」(19.9%)、となっている。

「仕事」や「物価」、「教育」、「信仰」といった項目は 1 割か、それに満たない程度であり、ミクロな関係性の上での問題がより強く意識されていることがわかる（表 4)。

「Q9 就労時の不都合」については、9 つの選択肢の中から当てはまるものすべてを選択してもらった。全体では、「不都合・違和感を感じない」との回答が最も多く、ケース数に対して34.4%を占める。不都合・違和感の中では、言葉の面でとの回答が最も多く（29.2%)、次が「価値観の違い」(15.6%)、「習慣の違い」(14.3%) となっている。「国籍・民族に対する差別」、「人間関係」は 1 割程度であった（表 5)。7 割近くの外来住民が就労に関する何らかの困難に直面している一方で、その多くは、この問題を偏見や排除を伴った構造的な問題（エスニシテ

表 4

カテゴリ	回答数	有効%
国籍の違い	27	17.9
信仰・宗教	14	9.3
言　葉	56	37.1
気　候	8	5.3
仕事（職業）	10	6.6
人間関係	17	11.3
学校・教育	8	5.3
習慣の違い	38	25.2
価値観の違い	30	19.9
物価が高い	16	10.6
その他	17	11.3
不都合を感じていない	23	15.2
合　計	264	174.8

無回答6、有効ケース151

表 5

カテゴリ	回答数	有効%
賃金面	12	7.8
人間関係	16	10.4
国籍・民族に対する差別	15	9.7
言葉	45	29.2
信仰・宗教	5	3.2
習慣の違い	22	14.3
価値観の違い	24	15.6
不都合・違和感を感じない	53	34.4
その他	9	5.8
合計	201	130.5

無回答3、有効ケース154

表 6

カテゴリ	回答数	有効%
国籍・民族を理由に断られた	13	15.3
言葉が通じず苦労した	9	10.6
保証人を探すのが困難だった	17	20.0
条件の悪い物件を紹介された	1	1.2
家賃を割高で要求された	13	15.3
その他	41	48.2
合　計	94	110.6

無回答・非該当（自由回答含む）73、有効ケース84

ィ差別問題）とは捉えていないようである。

「Q12 住居を借りる際の不都合」は複数回答の項目である。全体では、自由回答（48.2%）を除くと、「保証人を探すのが困難だった」(20.0%)、「国籍・民族を理由に断られた」(15.3%)、「家賃を割高で要求された」(15.3%)、「言葉が通じず苦労した」(10.6%) といったものが挙がっている（表 6)。

「Q10 住みやすさ」については、全体の 93.3%が「住みやすい」と回答した。「住みにくい」との回答は、10 人（6.7%）である（表 7)。その理由（Q10-1、10-2、いずれも複数回答）については、「住みやすい」理由で最も多いのは「生活に便利」(59.1%)、次が「近隣関係になじみやすい」(34.1%) である。外来住民としての立場の映し出されたものは「日系人／外国人のニーズにあっている」(12.1%)、「日系人／外国人が多い」(17.4%) と、いずれも 2 割以下となっている（表 8)。「住みにくい」理由については、自由回答を除いては、「生活に不便」、「近隣関係になじみにくい」、「日系人・外国人が少ない」、「行政のサービスが充実していない」といった回答が挙がっている（表 9)。全体に外来住民としてよりも、生活者としての立場が前面に出た回答である。

表 7

		度数	%	有効%	累積%
有　効	住みやすい	139	88.5	93.3	93.3
	住みにくい	10	6.4	6.7	100.0
	合　計	149	94.9	100.0	
欠損値	無回答	8	5.1		
合　計		157	100.0		

表8

カテゴリ	回答数	有効%
日系人/外国人のニーズに合っているから	16	12.1
行政のサービスが充実しているから	12	9.1
生活に便利	78	59.1
（交通、買い物、学校・職場に近いなど。）		
日系人/外国人が多いから	23	17.4
日系人/外国人が少ないから	5	3.8
近隣関係になじみやすいから	45	34.1
その他	8	6.1
合計	187	141.7

無回答・非該当 25、有効ケース 132

表9

カテゴリ	回答数	有効%
生活に不便	2	22.2
（交通、買い物、学校・職場から遠いなど。）		
日系人/外国人が少ないから	1	11.1
近隣関係になじみにくいから	2	22.2
その他	6	66.7
合計	11	122.2

無回答・非該当 148、有効ケース 9

表 10

		度数	%	有効%	累積%
有　効	よくある	10	6.4	6.6	6.6
	ときどきある	62	39.5	41.1	47.7
	あまりない	35	22.3	23.2	70.9
	ほとんどない	44	28.0	29.1	100.0
	合　計	151	96.2	100.0	
欠損値	無回答	6	3.8		
合　計		157	100.0		

「Q7 トラブル時の不利感」は地元の人との間にトラブルが起こったときに外国人／日系人であることで不利になっていると感じるかを 4 段階で尋ねた項目である。全体では「ときどきある」が 41.1%、「ほとんどない」が 29.1%となっており、少なくない外来住民が不利だと感じる経験を持つことがわかる（表 10)。

さらに「よくある」「ときどきある」と回答した人に、不利の原因だと思うものを尋ねた Q7-1 では、最も多く選択されたのは「日本語が上手でないため、うまく考えが伝わらない」(38.6%)、次が「文化の違いのため」(32.9%）であり、外から来た者への偏見、信用のなさを挙げたのは 2 割ほどであった（表 11)。

表 11

		度数	%	有効%	累積%
有　効	日本語が上手でないため考えが伝わらない	27	17.2	38.6	38.6
	沖縄の人に、外からきた人への偏見があり倍用されない	16	10.2	22.9	61.4
	文化の違いのため	23	14.6	32.9	94.3
	その他	4	2.5	5.7	100.0
	合　計	70	44.6	100.0	
欠損値	非該当	85	54.1		
	無回答	2	1.3		
	合　計	87	55.4		
合　計		157	100.0		

以上の結果をまとめる。実際の不都合を問う項目（Q6、Q7、Q9、Q12）では半数程度が不都合を感じているという結果が出ている。ここでは、回答を見る限りディアスポラとしてよりも生活者としての視点が強い。しかし、特にトラブルについて限定して尋ねた項目では、言葉や、価値観・習慣の違いが原因として捉えられており、ディアスポラであることでのギャップやトラブルが存在することがうかがえる。

b. 沖縄社会とのかかわり（一次調査より）

次に沖縄社会との関わりを見ていこう。1 次調査では、「Q1.沖縄の友人の有無」と「Q4 沖縄社会と最も関わる場所」に注目した。「Q1 沖縄の友人の有無」では、全体では、沖縄の友人のいる人が 91.9%、「いない」との回答はわずか 11 人（7.4%）であり、多くがプライベートで沖縄社会と関わる機会があることがわかる（表 12)。

表 12

		度数	%	有効%	累積%
有効	いる	144	91.7	92.3	92.3
	いない	12	7.6	7.7	100.0
	合計	156	99.4	100.0	
欠損値	無回答	1	0.6		
合計		157	100.0		

「Q4 沖縄社会と最も関わる場所」は複数回答である。全体では、「職場」（54.6%）が最も多く、以下、「友人・知人」（35.5%)、「親戚」（23.0%）と続く。地域コミュニティ（自治体、地域の祭りや行事）や学校といった接点は一割程度しか選択されていない。外国人や日系人の住民が、ビジネス上の協働者として、友人として、親戚としてといった三点で沖縄社会の関係性の中へ組み込まれていることがうかがえる（表 13)。

表 13

カテゴリ	回答数	有効%
自治会	13	8.6
地域の祭りや行事	21	13.8
学校	15	9.9
職場	83	54.6
友人・知人	54	35.5
親戚	35	23.0
その他	3	2.0
合計	224	147.4

無回答 5、有効ケース 152

全体の傾向としては、ディアスポラ住民が対面的に沖縄社会に組み込まれるのは、職場関係・友人関係・親戚関係の中でである。これらは、入り込み戦略のとられる「場」であり、その傾向も、あとに見る戦略の形に影響を与えていると思われる。

c. 社会関係への参加（二次調査より）

このように沖縄社会に組み込まれている外国人・日系人の住民であるが、さらに詳細に2次調査から得られた声を拾ってゆくと、対象者のカテゴリごとに一定の傾向があることがうかがえた。全体の傾向でも見えてきた、生きる「場」の多層性に沿った自己の位置づけの違いである。

沖縄社会で成人したあと移民、帰国した日系1世においては、帰ってくるまでの長期間のブランクはあっても、生きる場はもともとの出身の地域コミュニティである。帰国後、住居や職を得るのには家族や地域のネットワークを活用し、普段あって話すのも子どもの頃からの近所の友人である。公共サービスとの関係も、沖縄で育ち、住み続けた場合となんら変わらない。沖縄社会やその中にある地域のコミュニティは成人するまでを過ごした場であり、その地域の中で、友人関係にせよ近隣関係にせよ関係性の中での位置づけや役割といった彼らの居場所はしっかりと保存されている。そのことは、日系1世へのインタビューの中で定着についての質問に対して出てきた、「帰ってきただけ」という説明にも現れている。元の席に収まりなおすことで彼らの位置づけに付随する社会的資源の使用権もまた再開した。彼らに保持されていた、その資源を活用する能力（日本語能力やそれら資源に関する知識など）もあいまって、彼らは社会的資源へのアクセスの不全というディアスポラの直面する問題を回避できているのである。そのような彼らは社会的地位の確立もやはり、たとえば「自治会長を経験」など地域コミュニティを基盤とした形で捉える。一方で、彼らにとって、移民の経験やその経験によってつながれる関係性は必ずしも現在において活用されるものではない。移民経験者のための協会で集まるにしても、移民先についての話題は思い出話が主であるという話からもそのことが読み取ることができる。彼らの社会的資源の獲得—信用の獲得—入り込みは、移民前に持っていた関係性を再活性化させることによって達成・形成されるのである（ケース1)。

これに対し、日系2,3世や帰化した外国人の場合は、オフィシャルな[4]関係性に沖縄社会における自己を見出す傾向があるようだ。たとえば、インタビューに答えてくれたある台湾出身者は、沖縄社会でいかにうまくいっているかを説明するために彼の娘たちの職業達成に言及する（ケース2)。また、ある日系3世の女性は、職業経験を沖縄も含めた日本社会で生きるうえでの強みとして繰り返し強調した(ケース3)。また、日系人の場合、クレームも含めて公的制度や公的機関への関心は高く外国人と比較すると信頼感がうかがえる（ケース3、ケース4)。さらに、沖縄社会内での自己を確立するのが職場というオフィシャルな場であるためであろう、教育での達成への言及、期待が見られることも、他のカテゴリと比べると特徴的である（ケース2、ケース3、ケース4)。彼らの入り込み戦略は、入り込みのなされる「場」が職業であるがゆえに、学歴や資格の取得、日本語能力の向上といった職業人としての達成につながる方法に向けて方向付けられていると考えられる。

彼らのオフィシャル志向は、あとに述べる帰化しない外国人の経験との比較からもわかるよ

うに、国籍、出身国で受けてきた日本語の訓練や顔立ち（日系人の場合）などでの就職しやすさ・職場でのなじみやすさや公的機関へのアクセスのしやすさの結果と言えよう。また、オフィスという場には、地域共同体とは違ったある種の開放性がある。業務に適応できるか否かという受け入れ要件は、地域共同体のそれよりも生得性が低く、明確化しやすい。また、獲得のステップや手段も明確であるため、努力しやすい。手が届きやすい（届かなくても、基準の明確さ、非人格的であることから納得しやすい）のである。また、対立の許容、情緒面でのドライさというビジネスライクの文化もまた一種の開放性として働いている。他者（この場合は、関係を取り結ぶカウンターパートであるホスト社会の者）に対しても自らに対してもその慣習を強調することで異質性のもたらす葛藤を避けることができるのである（ケース 2「職場では違ってても傷つかない、でも家で違ってたら傷つく」）。それを考えれば、彼らが職業をはじめオフィシャルな関係性に積極的な自己を見出そうとするのは当然と言えるかもしれない。だが、そうであるがゆえに、職業を通じて達成される沖縄社会への入り込みは包括的なものとはならない。情緒的な関係性（友人、恋人など）や、視点を沖縄社会の外部に残したものとなるし、アイデンティティも中間的なものとなる。

こと日系人に限って言えば、このような傾向は、一般に親戚の援助の存在が強調される彼らについても帰化した外国人とほとんど変わらない。生まれ育った故郷に戻ってくる 1 世の場合と異なり、2 世以降にとってはあらためて居場所（や社会的資源へのアクセス権、信用）を確保しなければならない、異郷なのである。これは、沖縄に対するルーツとしての愛着と並存している（実際、インタビューした日系人の多くが沖縄の文化に関心を寄せ、1 次調査で沖縄のアイデンティティへの愛着を表明している）。すなわち、意識の上で門中制度やウチナーンチュ意識によってつながりを持っていたとしても、＜想像の共同体＞はやはり想像のもので、実感的には作動しない。そこでは彼らは外国人同様の入り込み戦略を要求される。そのギャップが、ときに語られる「故郷のぬくもりへの失望」を形作っているのかもしれない。

もっとも、常に親戚がまったく彼らの定着に資していないというのではない。むしろ、親戚ネットワークが提供するのは来日してすぐの住居や、学校編入の手続きの世話やアドバイスなど、初期の、より実際的なサポートであり、精神的な拠り所まで含めたコミュニティではないのである。

そして、先に見たように全体的に包括されないが同時に沖縄とのつながりの意識をも併せ持つ彼らには、出身国と沖縄社会との架け橋としての自己確立を意識し、目指す者も多い（ケース 4）。

帰化していない外国人の場合、沖縄社会との関係を述懐するときに主たる舞台となるのは、友人、配偶者といった個人的でプライベートな関係性である。配偶者が沖縄社会の者であっても姻戚との関係はそれほど言及されず、親戚関係との交流はあるとしてもひととおりのものにとどまり、生活のためのネットワークとしてはさほど活発に機能してはいないことがうかがえる（ケース 5）。むしろ、強調されるのは友人関係である。定着の際のサポートの提供もそのような個人的な関係の中で行われる傾向がある。このように、沖縄社会との接点がごく個人的であることの影響もあるだろう、彼らが自己を見出すのも沖縄社会の中での立ち位置を通してではなく、基本的には個人的な人生設計やプライベートなネットワークのうえである（ただ、子

どもや子どもの同級生とのかかわりを通して、沖縄においての自文化の継承や、伝達を意識している例もあった)。

以上のような状況の中で、うまくやっていくための工夫として挙げられたのは、敬語、優しい言葉を心がけるなど、「言葉遣い」に関するものである。ミクロな関係性が主たる接点となるため、他のカテゴリの者よりも、受け入れ要件としてより個人としてのコミュニケーション能力そのものを意識するのであろう。「よく話し合うようにする」といったものも同様の位置づけに対応したものと思われる。

(3) 分析のまとめ

以上の分析で得られた知見を、研究の目的に戻ってまとめ、確認しておく。

①沖縄における多文化共生の実態について

ホスト社会としての沖縄にも異質性に起因するトラブルが存在していること(ただし、就労時の不都合をたずねたQ9やトラブルに遭遇したときに不利である理由についてたずねたQ7-1の分析からは偏見や排除を伴った構造的な定住外国人問題という認識はほぼなされていないことが窺える)、外からやってきたディアスポラの住民(外国人・日系人住民)の沖縄社会への組み込みは職場、親戚関係、友人・知人関係の3つの「場」で展開されていることの二点が確認された。

②沖縄社会の信用分配の仕方について

外からやってきたディアスポラの人々の生きる「場」が、その人のカテゴリによって、すなわちその持てる資源に応じて分化していることから、沖縄社会での居場所の多層性が見えてきた。また、そこでとられる戦略の差異は、沖縄社会の信用分配の仕方が、沖縄社会内においても一律ではなく「場」によって異なることを示している。日系1世の例からは、伝統的な地域共同体における地縁による信用の付与が、日系2、3世や帰化者の例からはオフィシャルな場における日本語能力と学歴の信用獲得の効果が、外国人の例からはミクロな関係性における言葉遣いの重要性が読み取られた。

3. おわりに

沖縄における多文化共生の実態調査から、ホスト社会としての沖縄にも異質性に起因するトラブルが存在していること(ただし、前章で見たとおり、構造的な定住外国人問題という認識はほぼなされていない)、外からやってきたディアスポラの住民(外国人・日系人住民)とホスト社会との共生は職場、親戚関係、友人・知人関係の3つの「場」で展開されており、地域社会とのかかわりは薄いこと、また日系何世か、日系人以外ならば日本国籍を持っているかといったその住民の条件により、身を入れる「場」の傾向が別れており、それと対応するように、意識される入り込み・信用獲得戦略も異なることがわかった。これらの知見は何を示しているのだろうか。

「場」と戦略のあいだには対応関係があるが、それらの組み合わせからは、入り込み・信用獲得戦略が向かう先、信用を付与し、その「場」における入り込みを受け入れられる要件は、どの「場」でも共通してその「場」をうまく動かすために求められる働きを交換する能力=個々

の「プレイヤー」がその関係性にアクセスする目的を達成するための協働の可能性を持っていると見なされることであると推測される。

ディアスポラの住民たちは、「場」の受け入れ要件（すなわち協働可能性）を満たすよう促され、それに応えながら入り込みのための戦略を形作ってゆく。それは、入り込みたい彼らの自由意志によるものだ。しかし、同時にそれは「場」の「合理性」に付き合わされるということでもある。「合理性」にのっとった形の入り込みは、必ずしも入り込み者の他者性を受け止めるものではない。調査中、多くの日系人からもっと、沖縄と出身国の中間的な位置にある自分たちを生かしてほしいという声が聞かれた。先に協働可能性ということを問題にしたが、異質で協働できなかった「他者」の部分を生かすような協働の場の新たな開拓を求められているのが、ホスト社会としての沖縄の現在といえよう。

ケース

ケース 1

No.82

年代：60 代

性別：男性

カテゴリ：ボリビア移民 1 世

○米軍基地で働いたあと、1958 年、貧しい沖縄を出て儲けるためにボリビア移民の新聞広告に応募。妻と二人。

→1993 年、60 歳のとき沖縄へ。92 年の来沖時には、「道は全部アスファルトになっているし、家はコンクリート…めまぐるしく変わってしまったという印象」（Q1,Q2）

○帰沖時からずっと両親の家に同居。引越しはなし（Q3）。「長男なので自分の家に帰ってきた、というだけ。元の畑もあり、今まで通り農業をやっていけるし、不自由はなかった。」（Q5）

→地元民とほぼ変わらない受け皿。

○ボリビアでは洗礼を受けなければ大学入学時や徴兵時に支障が出るので、子どもには日本名とボリビア名両方をつけた。日本名は漢字、男の子には頭取りしてつけた。（Q8）

タンカー、十三祝いをした。（Q9、10）カジマヤー等のお祝いは子供達がやってくれるならやりたい（Q11）。正月は沖縄式、ボリビアの独立記念日は沖縄では全然しない。ボリビア協会でもしない（Q12）。

→ボリビア名はボリビア社会適応のための戦略としての面が強く、日本名のほうに沖縄一門中へのつながりが見られる。行事への接し方から見ても、所属するコミュニティはあくまで沖縄のほうといえる。

○インターナショナルな時代だと言われているが、国籍、民族の違いは結婚の障害になると思う（Q22）。習慣なども違うので、年を取っていくにつれて困る事が出てくる（Q20）。しかし、子供達は気にしていない（Q22）。しかし、「そうはいかんもんなぁ」。（ボリビアで）子ども達が高校・大学になったら現地（ボリビア）の異性の友人や恋人をいっぱい家に連れてくるよ

うになった。こうゆう社会だし、時代の流れでもあるからしょうがないとしか言えなかった（Q21）。　→時代の流れとのずれの認識。子どもを通しての変容。

ケース2
No.148、107
年代：夫70代、妻50代
カテゴリ：台湾出身

移動経過
○夫；基地関係のアメリカ人の需要を見込んで、商売のため台湾から沖縄に移住（1972年）。
妻；結婚のため移住（1977年）。
○中国政府との関係を嫌って帰化。

アイデンティティ、ネットワーク
○名前は、元の名前の漢字から一文字とり、当時の家族の状況を託して決めたため思い入れがある。（Q4-4）
○出身国の風習に対してはこだわりなし。合理主義？（No.9）
○華人ネットワークは普段の付き合いはなし。集まるときに特に中華料理を食べることもない。中国語で台湾の話をする（No.7）
○友人は、夫は特になし、妻は地元の奥さんたちの友達がいる。（No.18）

トラブル
○トラブルを避けるコツは「何もなし」。「東北の何県の出身かなぁって思われたのよ」（Q.5）日本語ができる上、見た目が日本人と区別がなく、また、帰化の際日本風の名前をつけ、それを普段使用しているためかと思われる。（住居は地主と直接交渉して借りる。「日本語も通じるし。」（Q3）／店などでも「別にどうも感じないんですね～やっぱり自分の故郷と同じ。」（Q4-2））

入り込み
○「日本では外国人／中国人は排除される」という言説のほうを嫌がらせを言っていると感じる。「わざとあんな悪いこと言ってるのよ。だけど、うちの子はね、一人はA病院の検査技師、もう一人はB大学出てC（＝県内大手企業）で働いています。」（No.22）
→高学歴取得、信用の高い職業につくことに安定感を見出す？

将来
○夫；台湾へ帰ることは考えていない。老後はわからない。子供のことは子供に任せる。
妻；老後は台湾へ帰るかもしれない。お父さんは兄弟がみんな亡くなったでしょう、私は兄弟がいっぱいいるから楽しみ。半年とか何ヶ月かとかで行き来して住みたい。（台湾へ行くと）子供は言葉が通じないから生活できない。絶対に日本に住む（だろう）。
→望郷というより、個人のつながりへの愛着。あまりこだわりがないのは、出身国との行き

来がしやすい（近い、比較的情勢が安定しているなど）現状のためか？

ケース3
No. 14
年代：20代
性別：女性
カテゴリ：ペルー日系3世

移動歴
○不景気・治安を案じてペルーから沖縄へ移住（1992 年）。中心になって進めたのは母。初めに、姉が働きに来ていて、その後、私を呼んだ。両親は、後で来た。一度は、親戚もいるし、沖縄へ。（沖縄で）まず日本語を覚えたり、文化とか、まずはそういうのを勉強して、それから住む場所を選ぶっていう（ことで）。親戚は皆沖縄だから。誰も（つてが）いないと不安だから。(Q1)

沖縄へのまなざし
○夫は向こう（ペルー）に帰りたいと思っている。でも、私は、治安や教育を考えると沖縄がいい。（歳をとっても）ここで年金もらって暮したい。(Q4-1)
○日本の年金や社会保障には、プラスのイメージがある。障害年金や、遺族年金もある。先行き不安なんていうけど、こんなの（社会保障は）日本が一番。皆ちゃんと払ってほしい。外国なら、払ってなかったら貰えないけど、日本は減額や免除もあるでしょう。
私は、以前、生保で働いていたから、普通の日本人より詳しいみたい。全部、会社で教えてくれた。(Q4-3)

沖縄社会／日本社会への組み込み
○こっちの人にとっては、私は、昔からいた日本人と似た感じということで、懐かしがられる。考え方とか、言葉とか。日系の人は方言を使うから、お店のオジィ、オバァには親近感を持たれる。（しかし、全く分け隔てなくというわけではない。）言葉がわかっていても、（周りの人に）気持ちが違ってる（と思われる）。ビックリしちゃうみたいね。(Q4-2)
○職場でも、日本人と上手くやってくコツなんて、特には。ただ、合うときに一緒に遊ぶだけ。あとは、仕事では日本人と一緒。(Q5)
○（職場では）本土の人が多いので、「外国人」扱いというより、「沖縄の人」扱い。昨日も、「なんで、言葉の終わりに『さー』ってつけるの？」って（聞かれて）。「そんなことないさー」って答えたわけさ（笑）。気をつけて話してるつもりでも、やっぱり（沖縄の）訛りは出てしまう。(Q17)
○（名古屋では）私は、見た目や言葉が日本人っぽいから、外国人というよりも沖縄の人って感じで（受け止められて）、検査のところで働いていた。(Q6)
○（弁護士事務所で通訳の手伝いをしていたときも）ペルー人のトラブルに巻き込まれたり、いろいろ危ない目にもあった。……でも、あれこれあっても、私は弁護士さんと一緒にいる

分、法律の知識があるから。ほんとに危なくなったら、警察に行けばね、助けてもらえる。脅かされても大丈夫。(Q6)

○沖縄は（日系人が）少ないからね、結局職場の人とかと仲良くするしかない。一人ではやっていけないでしょう。そうして、そこに馴染んじゃう。内地は（日系人が）結構いるから、そこで固まってしまって、いつまでも日本語も覚えない、文化にも慣れない。そこでぶつかっちゃう。……外国人だからって甘やかすし、甘える。

私は、自分から、普通に扱ってくれって言う。保険会社に入ったときも試験があったんですよ。ここで外国人だからって特別扱いされてたら、いつまでたってもこの難しい漢字が覚えられなかった。もう、普通と同じようにって。何もかも。勉強して100点取りました。(Q18)

○大学とか学校は、真面目に行っておけばよかった（出産のため中退）。自分で払って行っていたからね。親のお金で行っていたら無理やりにでも行かされたかもしれないけど。やっぱり仕事探すときに後悔するよね。資格も持っていないから。職安とか行って、ちょっといい求人だなと思ったら、（条件に）ナントカ1級、2級って…。子ども好きだから、保育園なんかいいかと思ったら、「保育士」資格がいるって。がっかりした。

余裕ができたら、大学で勉強したい。（大学では）社会の勉強とかするじゃない？お客さんと話をするのでも、知ってると知らないじゃ自信が違う。……営業なんかしてると経済の話とかもでてくるし、（知らないと）自信がなくなってくる…。でも、大学に行く事で自信がつくと思う。(Q28)

○貯金の目標はある。子どもも学校に行かせたいし、土地はあるから、家も建てたいな。子どもに残してあげたい。……（子どもの進学について）いやがるなら無理強いはしないけど、目標を持つという意味で、大学を目指すのはいいこと。大学は、資格や就職のためばかりでなく、責任感や人間性を養うところ。行きたいと思ったときのためにも、お金は貯めてあげたい。(Q35)

○日本人と結婚した友達はちょっと大変みたい。言葉がわからないときもイライラするし。私たちの育った環境（ペルー式）では男も女も家の中のことを分け合ってするんですよ。……それが普通だと思って結婚してみたら（日本人の夫は）なんにもしない。「これは何なんだぁー」って。

職場なら習慣の違いがあっても傷つかない。でも、家で違ってたら傷つくよね。(Q22)

○子どもの誕生日は、あっちのやり方を教えたいので、ペルー式で。……いとことかも近所の子も呼んで、ペルーのやり方はこんなだよって教えて。日本人もこういうの好きよね。（おもちゃをお土産に持たせるから）「得する」みたいな。(Q12(1))

ケース4

No. 67

年代：20代

性別：男性

カテゴリ：ペルー日系3世

○大学在学中、帰化のため来沖。在沖中、ペルーの治安が悪化して、沖縄で勉強を続けるよう親戚に勧められて、残る。(Q1)
○定着に際しては親戚の助けが大きい。(Q3；来沖当初、おばさんの家に泊まる。Q4-3；日本語のわかるおばさんがいたので、大丈夫だった。Q4-4；(行政との関係は) 最初は日本語のわかるおばさんと一緒に行っていたから大丈夫。(保険証、お金は) 最初は祖母の保険に入っていたから大丈夫。今は自分のものがある。Q5,5-1；親戚から「こういうときにはこうする」とかたくさん教わった。Q14；(父の求職に関しては) 親戚のつてがあった。)
○模合による (日系人？) ネットワーク (Q24)
○日本での学歴→職探しに有効 (Q14)
○ (アメリカ入国のときなど) 信用あるものとしての日本国籍 (Q13)
○敬語使いに気を使う。(沖縄の大学入学当初は) どう受け取られるかわからなくて、自分を抑えていた。言葉ができないときは自分から壁を作っていた。
○沖縄への (最終的な) 移住希望。「沖縄 - 南米の架け橋」としての存在意義を見出している。(Q35)

ケース 5
No. 144
年代：30 代
性別：女性
カテゴリ：フィリピン出身

○沖縄出身の輸入業者である夫と親戚の紹介で知り合い結婚、沖縄へ移動した (Q1)。
○デパートの中の靴屋の店員 (フィリピン) →夫の仕事を継いで自営業 (沖縄)
○帰化していない。日本のビザではフィリピンに行っても 1 ヶ月しかいられないから。今持っている永住権で問題ない (Q13)。
○引越し経験なし、夫とアパートで同居 (Q3)。
○コミュニケーションは来沖当時も今も「大丈夫」。来沖時には日本語は話せなかったが、徐々に話せるようになった (Q4-2)。夫と友人、テレビから日本語を学ぶ。お金の計算も夫についてもらい、教えてもらう (付録)。
○沖縄はフィリピンと食材が似ているから大丈夫(Q7)。
○「トラブルなし」(Q6)。
○夫から現在の仕事を引き継ぐ。(仕事に関して) 希望は特になし。沖縄で外国人が仕事するのは難しいから。今の仕事で満足 (Q16)。
○来沖時、上手くやっていくために夫と友人 (フィリピン人) からアドバイスあり。挨拶する、言葉は優しく、など (Q5-1)。
○バカにされても言葉がわからないので大丈夫 (付録)。
→定着のための資源は主に夫と友人。夫の親類との交流は、あまりつっこんだものはない模様。
○フィリピン人との交流はあまりなし。店があるのは知っているが、忙しくて行けない (Q24)。

フィリピンの人とはコミュニケーションが少ない（みんな忙しい）（Q18）。たまに夕食を一緒に食べるくらい（Q19）。

○フィリピンのお祝いについても行けない場合が多い（Q12）。フィリピンのテレビ、映画に興味はない。アメリカ映画を見る（付録）。

○毎週日曜日に教会に行きたいが、忙しくて行けない。食事の時に自分の中でお祈りをする（Q25）。

○日本人の友人が多い(Q18)。普段の遊びも、夫よりも沖縄の友人と出かけることが多い(Q29)。

○沖縄の人は本土の人よりも人がいいと思っている（Q2）。「沖縄の人はいい人。だけど、いい人もいれば悪い人もいる。（内地の人は冷たいと思っている）」（Q23）。「沖縄とフィリピンは近い感じがする。本土とは違う。」（付録）ただし、本土での在住経験はない。

○お店の客は地元の人と、ときどき観光客（Q32）。

○今は日本よりも沖縄に住んでいると意識している（付録）。

注

1) http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html（法務省入国管理局登録課『登録外国人統計調査（届出統計）』、2002年当時）。

2) 石川友紀『日本移民の地理学的研究―沖縄・広島・山口―』榕樹書林、1997参照。

3) 越境がなされ、移住者とホストが種々の資源の獲得を目指しながら接触するときにどんな戦略が用いられるかを論じたものに、Walter L. Wallace, *THE FUTURE OF ETHNICITY, RACE, AND NATIONALITY*, 1997.（W. L.ワラス著、水上徹男・渡戸一郎訳『エスニシティ・人種・ナショナリティのゆくえ』ミネルヴァ書房、2003）がある。そこでは、資源獲得のための戦略は、勝つべき正当性があるとして遂行者に心理的な利益を与える文化構造戦略（偏見、差別、ナショナリズムなど）、前者とは違い、物理的に行われる社会構造戦略、移住者・ホストの両集団や、競合するほかの集団間の関係性に働きかける連合戦略の3つに分類されている。基本的にこれらの戦略は移住者・ホストの双方に共通して用いられるものとしている。それによると、移住者たちが、すでに満たされ、構造化されたホスト社会の連合（coalition）のニッチに参入しようとすると、パイの防衛のために貶められ、ジェノサイドから消費市場の分裂までさまざまな方法で排除されるか、もしくは共通の敵に向かう共同者として受け入れられる。本研究はこれらの過程のうちでは、移住者がすでにあるホスト社会の連合に入り込むときの実態ならびに戦略に着目するものだと位置づけられる。

4) 本研究では「オフィシャルな」とは、職場、公共機関など公的な領域にあることをさす語として用いている。

文　献

石川友紀『日本移民の地理学的研究―沖縄・広島・山口―』榕樹書林、1997

Walter L. Wallace, *THE FUTURE OF ETHNICITY, RACE, AND NATIONALITY*, 1997.（W. L.ワラス著、水上徹男・渡戸一郎訳『エスニシティ・人種・ナショナリティのゆくえ』ミネルヴァ書房、2003）

法務省入国管理局登録課『登録外国人統計調査（届出統計）』、2002年当時
http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html

（さきはま かよ・人文社会科学研究科修了生・国際社会学）